

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00511

研究課題名(和文)パイフ及びヴィジュネールと16世紀ヘブライ詩学：「詩」概念の新たな展開と実践

研究課題名(英文)Baif and Vigenere- Hebrew poetics in Sixteenth-century France

研究代表者

伊藤 玄吾 (Ito, Gengo)

同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授

研究者番号：70467439

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においてはまず16世紀フランスのヘブライ語学者たちがヘブライ語詩について論じた重要文献を丁寧に読み込み、そこに見られるヘブライ語詩の特殊性の理解について、とりわけギリシア・ラテン古典詩との共通性と差異の認識、そしてそこから生まれる新たな「詩」概念について考察した。さらにアントワヌ・ド・パイフおよびブレイズ・ド・ヴィジュネールといった「ヘブライ的真理」にこだわる16世紀の博学な詩人による旧約聖書詩篇の翻案を分析し、それが単なる翻案・翻訳ではなく、実は極めて挑戦的な活動であり、詩の言語さらには詩の創作そのものにかかわる詩学上の重要な問いを深める場であったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最大の意義は、16世紀にフランスにおけるヘブライ語研究およびヘブライ詩研究について当時のヘブライ語学者の人脈や出版物を詳細にたどり、旧約聖書詩篇翻案の背景を先行研究に比べ遥かに広く深く明らかにしようとしている点である。S. ケスラー＝メスキッシュやM. ジャヌレといった重要な先行研究が必ずしもカバーしていなかったヘブライ語詩関連の文献のリストを作成したこと、またジャン＝メルシエやG. ジェネブラルといった学者たちによる中世ユダヤ学者の詩篇註解を用いることで、「ヘブライ的真理」にこだわりを見せたパイフやヴィジュネールといった博学な詩人の翻案の意義をより深く考察できるようになった。

研究成果の概要(英文)：Based on careful reading of important texts on Hebrew poetry written by 16th century French Hebrew scholars, this research attempts to understand the poetic peculiarities that 16th century French poets found in Hebrew verses, especially in relation to Greek and Latin classical poetry, and the new concept of "poetry" that emerges from these considerations. It also tries to analyze the adaptations of Hebrew Psalms by learned poets Jean-Antoine de Baif and Blaise de Vigenere, fully inspired by "hebraica veritas", in order to reveal that they deepened, through these challenging practices, important questions concerning the poetic language as well as the creation of poetry itself.

研究分野：フランス16世紀文学

キーワード：パイフ 16世紀フランスの旧約聖書詩篇翻案 16世紀フランス詩 ルネサンス詩学 詩と韻律

1. 研究開始当初の背景

16 世紀ヨーロッパにおいて旧約聖書「詩篇」の研究や翻訳・翻案がいかに重要な役割を果たしていたかについては既に多くの研究がなされ、それらが旧約聖書文献学の文脈においても、ルターやカルヴァンらの宗教改革の神学的文脈においても、またヨーロッパ各国語の文学史や音楽史の文脈においても、実に広くかつ深く影響を及ぼしたことが度々指摘されてきた。

16 世紀フランスにおける詩篇翻訳・翻案をめぐる重要な研究としては、Michel Jeanneret による『16 世紀における詩と聖書の伝統』(1969)があり、詩篇翻案を行った詩人たちそれぞれの宗教的背景を一応踏まえつつも、主として文体研究の観点から詩篇翻案の意義を論じ尽くした最も重要な先行研究である。その後の重要な研究としては Veronique Ferrer, Anne Mantero 編の論集『16・17 世紀における聖書翻案』(2004)があげられる。16 世紀フランスの詩人・学者たちのそれぞれの詩篇翻訳・翻案の文体研究という観点に絞れば、これらの先行研究ですでに多くが論じ尽くされていると見ることもできる。その一方で、この時代の詩篇翻訳・翻案を一つの大きな文化的、言語史的、文学史的現象として包括的に捉えようとするならば、そこにはまだまだ解明すべき重要なポイントがあると考えられる。

特に翻訳・翻案者自身がヘブライ語聖書における詩篇テキストの内容や形式、とりわけその意味の多層性についてどれほどの見識を有しているかによって、その翻訳・翻案には大きな違いが出るが、詩篇翻訳・翻案の黄金世紀とも言える 16 世紀においてとりわけ「ヘブライ的真理」へのこだわりを見せた博学な詩人たちが具体的にどの程度の材料を手にしていったのか、たとえば、彼らの周辺にはどのような学者がおり、またどのような文法書や辞典、註解書等を手に翻訳を進めていたのか、といったことについては十分に詳細な調査や分析がなされているとは言えない状況がある。また「ヘブライ的真理」に基づくテキストの詩的性質の理解が、ギリシア・ラテン古典詩や俗語世俗詩の伝統における「詩的なもの」の理解と大きな乖離を見せる場合に、それをどのように調整しようとしたかの問題は、単なる文体の問題を超え、より本質的な詩学の問いへとつながるものである。ところが、こうした問題の所在についてはたびたび一般的な形で言及があるものの、その問いと正面から向き合って詳細かつ徹底的に考察を行おうとする研究はほとんど見られない。

私自身、これまで 16 世紀の詩人ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフの詩篇翻案の諸問題について、主として韻律や音楽との関係を中心に研究してきたが、一方でこの詩人の「ヘブライ的真理」への関わり方を詳細に検討することがこれまでできておらず、それらがテキストの分析や解釈上の深まりを阻む大きな要因の一つとなっていた。よって本研究はその欠落を埋める重要な仕事ともなる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、16 世紀フランスの学者・詩人たちによってなされた旧約聖書「詩編」(及びその他のヘブライ語詩)を主題とする様々な研究や註解・翻案等を詳細に検討し、それらがフランスにおける詩の概念の形成及び創作の実践において、ギリシア・ラテン古典詩による影響とは異なる次元でいかなる刺激を与えたのかを具体的に明らかにすることにある。とりわけ、それらが旧約聖書の詩編を翻案した博学な詩人ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフ及びブレース・ド・ヴィジュネールの作品の中にどのような形で反映されるに至っているかを考察するものである。

3. 研究の方法

本研究の方法上の重要なポイントは 2 点ある。(1) 16 世紀フランスのヘブライ語学者や詩人たちが参照したと考えられるヘブライ語やヘブライ語詩に関する重要文献をできるだけ詳細に辿り、丁寧に読み込んだ上で、そこに見られる「詩」概念の特性を、内容面および形式面において可能な限り明らかにする。近年の 16 世紀研究においてギリシア語やラテン語の古典テキストを用いる際には、基本的に同じ 16 世紀に出版されたエディションや註解を用いて、可能な限りアナクロニズムを避ける努力を行なっているが、ヘブライ語テキストに関しては、16 世紀に流布していたエディションや諸註解を十分に参照して論じられることは極めて稀であり、逆に現代の旧約聖書学の知見をもとに校訂されたヘブライ語テキストや註解を用いて比較研究が行われており、そこには深刻なアナクロニズムがある。それに対し、本研究では常に 16 世紀に刊行されたテキストや註解を基盤に議論を進める。(2) 16 世紀フランス詩人における旧約聖書詩篇の翻案について、それを単なるヘブライ語原典との比較研究にとどまらせることなく、それぞれの詩人にとっての、詩の創作そのものに関わる、詩学上の重要な問いを深める場として、また挑戦的な詩作の実践を求める場として捉える。

4. 研究成果

本研究の1年目は研究の土台作りとして、16世紀フランスにおけるヘブライ学の系譜をたどり、どのような学者たちがどのような文法書や詩学関連の研究書・注解書を出版していたのかを探り、その水準と傾向性について整理した。この分野の重要文献である Sophie Kessler-Mesguich の『フランスにおけるヘブライ語研究 (1508-1680)』(2013)を手掛かりに、16世紀のフランスにおいて「王立教授団」を中心にヘブライ語教育・研究を担った学者たちの系譜をまとめた。また、Marvin J. Heller の書誌学的研究『16世紀におけるヘブライ語書籍』(2004)及び Lyse Schwarzfuchs の『16世紀パリにおけるヘブライ語書籍』(2004)を出発点として、16世紀フランスにおけるヘブライ語及び詩篇関連、ユダヤ教関連の印刷物の全体像を把握するとともに、バイフやヴィジュネールが創作活動に乗り出した16世紀中期以降のパリ周辺でのユダヤ研究の状況を詳細に把握することを目指した。中でも聖書における詩文テキストに関する論議を整理し、それまでのラテン語やギリシア語を基盤とした聖書概念・文芸概念との間にいかなる差異が生じたのか、それが彼らの創作活動にどのような影響を及ぼして行ったのかを探った。実際フランスに赴いての現地調査では、国立図書館において16世紀当時の実際の文献を細部にわたって確認するとともに、古書店・古書市での古文書渉猟も行ない、そこで16世紀末までのフランスのヘブライ語学・詩学の水準を確認するのにもっとも適した文献の一つである『ヘブライ語教程』*Linguae Hebraicae Institutiones* (パリ、1609年刊)の実物入手できたことはその後のより詳細な研究に向けて大きな収穫となった。

本研究の2年目には新型コロナウイルス感染症の流行もあり海外の図書館や研究機関に赴いての調査が不可能となったため、主として2019年度に収集した資料の読解と分析を進め、16世紀初期から中期にかけて出版された文法書や辞書類、註釈類をもとに、この時代におけるヘブライ語およびヘブライ語詩法に関する議論の射程を探る作業を行なった。また16世紀初頭に出版されたユダヤ教関連の書物の中でも、本研究との関連において重要な意味を持つものとして、1510年代に出版された『詩篇ミドラッシュ』、1520年代にボンベルクによってヴェネチアで出版されたいわゆる『ラビ聖書』に収録されている詩篇テキスト及び中世の各種註解およびタルグム(アラム語訳)があり、さらには詩人バイフ自身が自身の詩篇翻案において利用したと証言している、S. Pagninus, Felix Pratensis, Johannes Campensis, François Vatableらの詩篇訳および註解があるが、それらとバイフの実際の翻案の関係性が具体的にどの程度のものであるかを、テキストに即して検証する作業を進めた。さらに、16世紀初期のヘブライ語学習の揺籃期を経て、中期から後期にかけては、聖書ヘブライ語だけではなく中世の様々なラビ文献を扱う水準に達する者も現れたが、そうした文献のうちでも、詩に関する何らかの言及があるものを抽出していった。さらにはユダヤ教の聖書解釈の伝統の中で極めて重要な位置を占めている、11世紀フランスのイツハク・ベン・シュロモー(通称ラシ)による詩篇註解において、ヘブライ語テキストの難解な語句を当時のフランス語を引用して説明している箇所がしばしば見られるが、それらが16世紀の諸註釈者たちによっていかに利用されたか、またフランス語詩人による翻案に何らかの意味で影響を与えているか否かについても調査と考察を行なった。

本研究の第3年目には、16世紀初期から中期にかけて出版されたヘブライ語詩に関する文献のうち Moshe ibn Habib, David ibn Yahya, Elija Levitaらユダヤ人学者の手になる詩篇関連の著作と、クリスチャン・ヘブライストである G. ジェネブラール、S. ミュンスターによるそれらのラテン訳の分析が中心となった。また、ヨーロッパの文芸思潮とユダヤ教言語文化との相互作用の観点も取り入れるために、イタリアのトスカーナ語や南仏のオック語の伝統から生まれた詩のテーマや韻律形式、表現のトポスがどのようにイタリア在住のユダヤ系詩人や学者たちに影響しているのかを Azaria de' Rossi の著作を参考に考察した。詩人ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフはヴェネチアでフランス大使をしていた父ラザールの影響もあってイタリアとの関係も深く、彼独自の詩篇翻案のアイデアや「ヘブライ的真理」への関心については、当時の文芸の最先端地であるイタリアからの影響も大いに考えられる。

本研究の4年目には京都ユダヤ思想学会15回学術大会でシンポジウム「文法、カバラー、詩-ヨーロッパ・ルネサンス期の言語思想とユダヤ-」を企画し、それまでの研究成果の一部を用いて「ヘブライ語とルネサンス詩学-TehillimとPsalms」と題する研究発表を行なった。そこでは主としてフランスにおけるヘブライ語学や「詩篇」研究の背景と、それらがルネサンス詩学の分野で切り開くことになる新しい地平について論じた。また実際にフランスを訪れての調査も行い、中世ユダヤ教の釈義家イツハク・ベン・シュロモー(通称ラシ)の生地であるトロワ市にあるシナゴークおよびラシ・文化研究センター、そしてパリのフランス国立図書館所蔵の重要な16世紀関連文献について体系的に調査を進めた。

本研究の最終年度は、前年の研究発表の内容をもとに学術雑誌『京都ユダヤ思想』第14号に詳細な研究報告を掲載するとともに、フランスで更なる文献調査も行い、16世紀におけるヘブライ語詩篇研究関連の文献目録の充実を図った。また上でも述べた16世紀における詩篇翻訳の文体に関する最重要先行研究である Michel Jeanneret の著書を改めて検討し直し、自らの研究の独自性や方向性についての再確認も行った。フランス16世紀におけるヘブライ語及び詩篇に関わる研究や註解・翻案等の文献は、研究を開始した当初に予想していたよりはるかに多く、その分、文献の整理、読解、分析、考察にも想定以上の時間がかかっている。またそれに伴って、16世紀におけるヘブライ語・ヘブライ詩篇の研究状況と詩人バイフ及びヴィジュネールの詩篇翻訳・翻案の実践との関わりについても論じるべきポイントが当初より多角化したため、今後はそれらを可能な限り丁寧に含み込んだ形で各詩篇に関する発表を重ねていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 伊藤玄吾	4. 巻 14
2. 論文標題 ヘブライ語とルネサンス詩学—TehillimとPsalmiのあいだ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都ユダヤ思想	6. 最初と最後の頁 189-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤玄吾	4. 巻 35号
2. 論文標題 ジャン=アントワヌ・ド・バイフのvers mesuresと教訓詩（3）- Etrenes de poezie fransoeze an vers mezuuresにおける「リノスの教え」と「ナウマキオスの結婚訓」の翻訳をめぐって -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ロンサル研究	6. 最初と最後の頁 85-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤玄吾	4. 巻 34
2. 論文標題 ジャン=アントワヌ・ド・バイフのvers mesuresと教訓詩（2）- Etrenes de poezie fransoeze an vers mesuresにおける「（偽）ピュタゴラスの黄金詩」Les vers dores de Pitagorasの翻訳をめぐって -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ロンサル研究	6. 最初と最後の頁 127-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤玄吾	4. 巻 32
2. 論文標題 ジャン=アントワヌ・ド・バイフのvers mesuresと教訓詩 - Etrenes de poezie fransoeze an vers mezuures (1574)における「（偽）ポーキュリデースの教え」の翻訳をめぐって -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ロンサル研究	6. 最初と最後の頁 67-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤玄吾	4. 巻 -
2. 論文標題 ビエール・ド・ロンサールとジャン＝アントワーヌ・ド・バイフ プレイヤード派における競合と対立 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Correspondances コレスポンドランス 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集	6. 最初と最後の頁 19-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 伊藤玄吾
2. 発表標題 ジャン＝アントワーヌ・ド・バイフのvers mesuresと教訓詩(4) - Etrenees de poezie fransoeze an vers mezuresにおけるヘシオドス『仕事と日々』の翻訳をめぐって -
3. 学会等名 日本ロンサール学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Gengo Ito
2. 発表標題 Baif et les Sentences du pseudo-Phocylide
3. 学会等名 L'atelier franco-japonais, organise par Aya Iwashita et Anne-Pascale Pouey-Mounou (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤玄吾
2. 発表標題 ヘブライ語とルネサンス詩学 TehillimとPsalmi
3. 学会等名 京都ユダヤ思想学会第15回シンポジウム「文法、カバラー、詩 - ヨーロッパ・ルネサンス期の言語思想とユダヤ」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤玄吾
2. 発表標題 フランス16世紀文学の音空間 - レリ『ブラジル旅行記』、ユグノー詩篇、ロンサール『恋愛詩集』 -
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤玄吾
2. 発表標題 ジャン＝アントワヌ・ド・バイフのvers mesuresと教訓詩(2) : Etrene de poezie fransoeze an vers mezures (1574) における(偽)ピュタゴラス『黄金詩』Les vers doresの翻訳をめぐって
3. 学会等名 日本ロンサール学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤玄吾
2. 発表標題 西洋古代からルネサンスに至るハルモニア論と教育思想
3. 学会等名 教育思想史学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------